

子ども達には美味しいものを食べさせよう

宮本 和則

「おたく、いったい何の仕事してはりまんねん？」
「はい、えー小学生の子どもらと野外活動したり、
太鼓たたいたり、仮説実験授業やったり、ドッジ
ボールしたりして遊んでいます」「ほう、ええことし
てはりまんない」「はあ」。

大阪市内で、学童クラブの指導員をして、今年で
十九年になります。小学校の教員になろうと思って

いたのですが、あまりのオモロさに、ついつい長い
ことやっていますし、まだ当分この仕事、いや遊び!?
やろうと思っています。通称「指導員」という名で位
置づけられてますが、〃指導〃などそんな大それ
たこと、とてもできません。子どもらといっしょに
楽しいことを求めてやっているだけ。あいつらのお
かげで、人生楽しませて、いや苦しい時も多いです

が、やらせてもらっています。

うちのクラブは、大阪市内の南の端の方、大阪国際マラソンの舞台になる長居公園のすぐそばにある自動車修理工場の三階にあります。

自然の中で、毎日「ワイイ、ワイイ」と遊べるという豊かな環境にはありませんが、都会にあっても、この時代にあっても、なんとか楽しく、オモロイ生活ができないもんかと、毎日努力しております。

かぶとむしクラブでの生活

「ただいまー、もう、めっちゃはよ長居公園行きたいわー。もう誰か行ってるー?」「どないしてんなー」「はよケンパしたいねん」。ホームグラウンドの長居公園では、一年中、いろんな遊びが展開される。ビー玉、ボールのあてあい、Sケン、ドロだんごづくり、一輪車でのバトル、キックベースに穴掘りetc. 必ずといつていいほど、何人かの子どもらが集団で遊んでいる。

流行の遊びがあつて、いつも遊び相手がいる環境は、地域で子どもの群れが皆無に等しくなった今、とても重要なことではないかと思っています。

「なあ兄ブー（兄ブーとは僕の呼び名）、この川どこまで続いてんねやろー?」「行ってみよかー。ほんなら、行ってみたいやつ、明日十時に学童集合な!!」「バイバイ」。

と当日、天気にも恵まれて、いざ駒川を遡上する。橋の名前をいちいちメモにとるやつ。ラーメン屋ばかり数えてるやつ。「あつ! 大阪城やあれー!」と数時間かけて大阪城へたどりついた。以来、このワクワク感にとりつかれた子どもらは、「大阪城たんけん」と称して、毎年、数人のグループを組んで必ず一度は大阪城まで歩いて行く。

話はさらにすすみ、自分達の住んでいるすぐ南側を流れる大和川（全国ワースト1の汚い川）はいつたいどこまで続いてんねんやろと、今度は、八日間かけて、学校の休みごとに歩く。わざわざ歩くのが

◀大和川、牛乳パックのいかだ



みそで、ゆっくりしたスピードで、まわりの景色を見ながら、おしゃべりしながら楽しんじやうのがこれまた遊びになる。僕の方もドンドンエスカレートするし、子どもらも年を追うごとに過激に歩こうとする。

三年前、〇―157事件の折、うちのクラブも毎年楽しみにしている七泊八日のキャンプを中止した。その時、子どもらは「エー」「ほんじゃどっか行こうやー」と二万五千分の一の地形図を広げて、見つけたところは有馬温泉。三日間の行程で有馬まで歩くことに……。今年は、一日三十キロメートルを目ざして歩くことに子どもらは燃えている。

こういう探検っぽい遊びは子どもらの心を捉えて止まない。

無事次の年に再開した七泊八日のキャンプもそう。カマドもトイレも、水道も、もちろん電気もない所へキャンプに行く。ごはんは大人が用意する時もあるが、基本的に子どもらの班（四〜五人）で

作って食べる。一瞬「エッ」と思う過激なキャンプだけれど、子どもらは大好きである。夏が近づくと、必ずや誰かが「はよキャンプ行きたいナー」と叫ぶ。

そして、モノづくり。子どもら好きですよー。ただし、キラいな子どももいます。

僕はたいてい、一つでも多くのことを経験させたいと思って、あーだこうだと言いながら時にはイヤがるやつも引っぱりこむのだけれど、先日、六年生のゆうとが、「兄ブー、オレ、ビーズ作ったことないねん。一から教えてえな」と話しかけてきた。そのとたんまわりの子どもは、「えっ!! ゆうと作ったことないんかー」「そやねん」と本人テレ笑い。六年間、僕のしつこいさをうまくいかくぐってきたんですね。

長いスパンで子どもとつきあう

六年間、一人の子とじっくりつきあえるというの

は、僕らの強みだと思っています。一年間で決着つけようとはあまり思っていない。

今、六年生のみなおという男の子がいます。彼は一年生の時から、ほとんど

「外で元気に遊ぶ」ってやつにのってきませんでした。「イイわー」と、たいていお部屋で本を読んでいる。これが悪いという訳じゃないんですが、僕は彼に、ただひたすらいろんなことを体験してほしいって思っていました。

ある日のこと、彼が三年生の時かなー、「オマエ一回一輪車持って行って乗ってこい!! ほんでイヤやったらやめとけや」と言うとき、いつもなら「イイわー」とふられるんだけど、この日はどうい風



ふきまわしか「ハイ」と言って、長居公園に持って行ったんです。

そうしてほしいと思って言ったんですが、あまりの素直な返事に僕の方があ然としてしまいました。が……その日以来、「今日は部屋で工作するから」(工作は彼の大好きなこと)と言っても、長居へ一輪車持って行ってしまうくらいに、ハ・マ・ッてしまったようで、今では、うちのクラブで一番上手に乗るようになってます。この事件で「強引さ」の必要性和G o o dなタイミングの必要性を教えられました。六年間という比較的長い期間、子どもとおつきあいさせていただけるので、「オレと関わってるうちにこいつを何とかー」というあせった気持ちで、とにかく色々とつめこみ体験させなあかんというふうにならずに済んでいます。

「言うこと聞かへんガキ」と大人の価値観

最近、いわゆる「言うこと聞かんガキ」が増えて

るように思います。一年生が可愛いのに可愛くない。三年くらい前から特に感じるようになりました。大人の言うことだけでなく、年上のお兄ちゃんやお姉ちゃんの言うことも聞かない。僕の言うことは聞かんけど、六年生のお兄ちゃんの言うことは聞くというのが、今までのパターンだったように思うのですが…。

これまたキャンプでの話ですが、六年生のこうじが、一年生に「○○くん、お米とってきて」と言うが、即座に「イヤ」と言われてしまい、彼は豆鉄砲くらったハトのようになっていました。夜の反省会で、これも六年生のたろうが「オレな、やさしく『お鍋洗つていてな』ってたのんでん。ほんなら『イヤ』言いよんねん。」「ほんでオマエどないしてんな」と言うが「オレ洗った!」。一同大爆笑。

でも、これ笑ってたらあかん話やと思います。最近、親が子どもによく言う言葉に「自分で決めたらイイのよー」があります。



▲ 火起こし器で火起こしにチャレンジ

ヤ」と言っではいけないのです。

そして、スーパーマーケットなどでたまに耳にする「○○ちゃん、そんなことしたらあのおっちゃんにおこられるよー」という言葉。やっぱり大人が大人として、ちゃんとした理想と価値観を持って、自分でダイレクトに子どもと対さなくちゃダメ!!

親の育て方が悪いから「生意気で言うこと聞かない子どもができるんや!」と文句ばかり言っても、自分の仕事がいまいきというわけではないので、僕がはつきり、「あかんことはあかんの

じゃ」と子ども相手に叫んでいます。

体験の幅をふやすのは「美味しいモノ」

基本的に子どもらは、元気でエネルギーを持っています。意欲もあります。そんな子ども達を相手

確かに自由な社会で自由に生きていくことは素晴らしいことだけれど、「あかんことはあかん!!」。人ががしゃべってる時は待つとか、挨拶するとか、やっぱりちゃんと教えとかなあかんことがあると思います。キャンプで「お米とってきて」と言われて「イ

に、結局我々ができることは、子どもらが体験の幅を広げていくためのお手伝いかなあと思ってます。

でも、「ビタミンC、OK。タンパク質、OK。

炭水化物、OK。さあ!! これは体に必要や。これは体にイイから食べなさい!」ではダメ。はつきりダメ。美味しくなくちゃ、美味しくなくちゃダメなんです。基本はココにあると思うのです。世の中、ほんまに美味しいモノは実はゴロゴロころがってるんですよ。それを我々が仕入れて、どんどん子どもに配り歩く。そこが、とても大事だと思います。

子どもは大人へと自立していく過渡期にある存在であり、その過程では、どんな人間に、どんな大人に、どんな自分になるのかということが問われ、自我が創りあげられなければなりません。でも単に「子どもは大人になる準備期間である」という位置づけだけではまちがいだと思うのです。「子ども時代」という現実の中で彼らは生きている。一生に一度しか体験することのできない、とても素敵な時

期。この時期を、大いに楽しみ、さまざまな体験をしなかったらえらい損害やと思うんですけど……。

そうなんです。ひたすら子どもらに体験の幅を増やしていつてもらいたい。たぶんこのことにつきると言っても過言ではありません。

子どもらが、オ・モ・ロ・イと興味を感じると、すごいパワーが生まれます。それこそ大人のパワーなんて目じゃない。彼らはとてもガンバリ屋でガマン強いのです。少なくとも僕はとても勝つ自信はありません。そして、子どもらは、自分の力をどんどん伸ばしていき自分のモノにしていくのです。

さあ、来年度も、“美味しくって栄養のあるもの”を探しまくって、子どもらに配りまくりーっと。

(大阪・東田辺かぶとむしクラブ)